

## 21世紀の学会発展のビジョンと戦略を考える

### 国際化の動きと国際化への対応

西野 仁（東海大学）

#### 1. レジャー・レクリエーションは輸入品

カタカナで表記される「レジャー」「レクリエーション」は、欧米から輸入された概念である。大正15年(1925)に鉄道省によって出版された「キャンプの仕方と其場所」の内容は、ほとんど欧米の「キャンプ・ライフ」状況の紹介を中心に、わが国の情報を盛り込んだものである。そこには、「気晴らし」とルビを付けた語句が見出される<sup>1)</sup>。

また、昭和初期には、レクリエーション運動を厚生運動と称し「健全なる慰楽」を奨励する機運があったが<sup>2)</sup>、戦争により中断し、「レクリエーション」の話は、カタカナのまま、社会教育法に表記された。欧米で用いられているleisureやrecreationの持つニュアンスを伝えるにはカタカナ表記が適当だろうとの判断がその背景にあったのだろう。いずれにせよ、レジャー・レクリエーションという概念が「輸入」されたということは、疑う余地のない事実である。



#### 2. 長く続いたではの神の活躍

ではの神とは、「アメリカでは」「ヨーロッパでは」などと、諸外国の状況を得意げに紹介する人たちに対する皮肉を込めた呼び名である。

昭和初期に、欧米のレジャー・レクリエーションの状況を視察するために、文部省から派遣された教官中田俊造は、2年間の滞在中の見聞を、帰国後間もない昭和9年に、「教育上より見たる娯楽と休養」にまとめた。中田は、「娯楽とは英語のいわゆるレクリエーション(傍点は筆者)である」<sup>3)</sup>とし、その重要性や教育を論じ、アメリカ、イタリア、ドイツ、イギリス、フランス、チェコ、スウェーデンなどの状況を紹介している。それぞれの国では、どうなっているという文調で、短期間にこれだけの情報を集めた行動力に長い

間、敬服していたのであるが、偶然、中田の著書と全く同一の記述箇所のある、アメリカで発行された英文本を見つけた。いわゆる種本が見つかったのである。

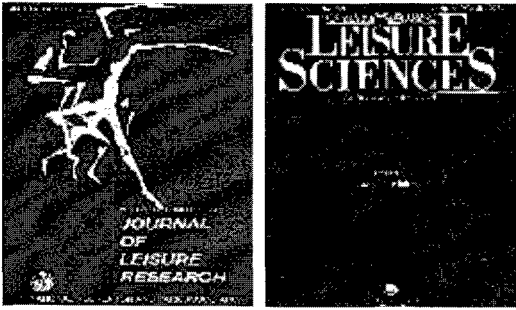
しかし、この時代出版された多くの書籍に、外国で出版された種本があったとしても、決して不思議ではない。新しい概念や運動が入ってきたら、しばらくの間、その先進情報を参考にするのは、きわめて自然な成り行きである。アメリカで多くを学んだ筆者自身、ではの神的傾向があると承知しているのだが、もうそろそろ、ではの神のご利益と決別する時ではあるまいか。

#### 3. より深く日本の視点で吟味する時代

レジャー・レクリエーションの領域においては、一方的な輸入超過の状態が長く続いた。どこか、不具合がありそうだ気付きながらも、状況に合わせて使ってきたふしがある。その結果「leisure」は「余暇」として、レクリエーションは、ゲームやダンスなど狭い範囲を指すことばとして定着した。また、カタカナ表記の「レジャー」は、おでかけ・行楽などを連想させるように定着しつつある。

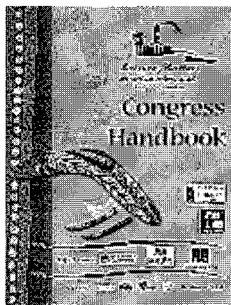
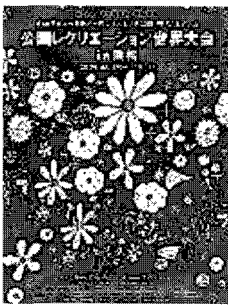
改めて、欧米で使われているleisureを分析すると、それを「余暇」や「レジャー」と訳すより、「ゆとり」や「くつろぎ」などと訳す方が、より適切だと思える場合が多い<sup>4)</sup>。輸入品を単にそのまま信奉するのではなく、わが国の文化や慣習などに照らし合わせ、理解を深める姿勢・より深く吟味することが必要ではあるまいか。

そのためには、日本人によって書かれたレジャー・レクリエーションの解説書やほんの一握りの和訳された本を読むだけでは、十分だとは思えない。できることなら、直接洋書や研究誌を探ることをぜひお薦めしたい。中でも、Journal of Leisure Research<sup>5)</sup>、Leisure Studies<sup>6)</sup>、Leisure Sciences<sup>7)</sup>の三誌は機会があったら、目次だけでも日を通しておく必要があると考える。



他に、World Leisure Associationによる World Leisure Journal, アメリカのThe Society of Park and Recreation Educatorsによるレジャー研究とレクリエーション教育関係のSCHOLEもおもしろい。

また、海外の学会大会にも是非、参加してはいかだろろうか。2004年9月に、静岡県浜松市で、IFPRA International Federation of Park and Recreation Administrationの世界大会が日本レジャー・レクリエーション学会も協賛し開催された。また、同じ月にオーストラリア、ブリスベンで、第8回 World Leisure Congressが開催された。どちらの大会にも参加したが、日本のレジャー・レクリエーション研究者の姿はほとんど見かけなかった。不参加の理由はいろいろあろうが、学会に積極的に参加し、海外のレジャー・レクリエーション研究の状況を探り、比較し、何がその本質かを見極めることをすべきではないだろうか。自分の目で耳で確かめながら、その概念や方法を吟味する必要があると主張したい。



#### 4. 国産のレジャー・レクリエーション論の確立を

多くを輸入に依存してきたレジャー・レクリエーション研究は、そろそろ、わが国独自の視点あるいは伝統的視点で構成しなおすことが必要なのではないだろうか。

そのための、材料は多くある。たとえば、禅者は古くから「遊戯三昧」ということばを説く<sup>8)</sup>。遊戯三昧

は、娯楽型・消費型の遊びではなく、創作的・自己表現的であると説明される。梁塵秘抄には、「遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけむ 遊ぶ子供の声聞けばわが身さへこそ揺るがるれ」と、また、徒然草に「冥利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ」(第38段)とある<sup>9)</sup>。これらは、ピーパーが主張する「余暇の本質」と類似点が見られ、「ゆとり」や「くつろぎ」「やすらぎ」「いやし」などと大いに関係しそうである。

#### 5. 東洋的レジャー思想を世界に紹介しよう

今でさえ、茶道、華道、盆栽など多くの活動を世界は知りたがっている。禅に興味を持つ外国人も多い。欧米から輸入されたレジャーやレクリエーションを日本の伝統や文化の視点で、しっかりと分析し、わが国らしいレジャーの考えをまとめたら、それを世界に紹介することが重要だと考える。そうすることで、レジャー・レクリエーション研究は、グローバルな規模で大いに論争し、世界平和や繁栄に貢献できると考える。残念ながら、本学会は国際化への対応が十分とは言いがたい。国際化の波に乗り遅れたように思う。とにかく、急がねばなるまい。

#### 参考文献

- 1) 鉄道省編キャンプの仕方と其場所、1925、p.8
- 2) 名古屋市、第二回日本厚生大会会誌、1940、p.1
- 3) 中田俊造、教育上より見たる娯楽と休養、中文館書店、1934
- 4) 西野仁、ゆとりの構造化に向けて、日本レジャー・レクリエーション学会大会、第33回、34回
- 5) Journal of Leisure Researchは、アメリカのNational Recreation and Park Associationの研究誌。社会科学系の論文で年4回発行。
- 6) Leisure Studies は、イギリスのThe Leisure Studies Associationの研究誌。社会科学系の論文で年4回発行。
- 7) Leisure Sciencesは、R.J.Burdgeらが設立し、Taylor & Francis社が年4回発行する学際的なレジャー研究誌。
- 8) 無能唱元、遊戯(ゆげ)、致知出版社、1997
- 9) 中野孝次著が 風の良寛、集英社、2000で紹介。